

村嶋英治「タイにおける共産主義運動と中国革命—タイ共産党の成立をめぐって」『岩波講座 東南アジア史 第8巻』（岩波書店、2002年）259—282頁

9 タイにおける共産主義運動と中国革命

—タイ共産党の成立をめぐって

はじめに

村嶋英治

二〇世紀の大半において、タイにとって最大の安全保障上の問題は、中国系住民（華僑・タイ籍華人）を中心とした共産主義運動からの脅威であった。一九三三年四月初めのプリーデー追放クートターに始まり、七〇年代に至るまで、繰り返されたクーデターでは、軍事介入の理由として常に共産主義の脅威に言及している。ところが、冷戦終結後タイ政府は、学校教育において中国語教育を長らく厳格に制限してきた諸規制を一九九二年二月四日に廃止し、さらに、二〇〇一年六月には、一九五二年一月以来の共産主義行為防止法（反共法）を廃した。これらは、二〇世紀のタイ指導者に通じた、共産主義とその主要な担い手であった中国系住民への警戒心が、消滅したことを示す象徴的な出来事であった。

タイにおける共産党の組織的活動は、一九二〇年代半ばに始まり、八〇年代半ばまで続くが、その運動の主要基盤は、華僑とその子孫からなる中国系社会にあった。とりわけ、運動開始の当初より第二次世界大戦期までは、中国で共産主義革命に参加したのち来タイした華僑が運動の中心的指導者であった。この時代の共産党は参加者が回想録で

も僑党と自称するように、まさに僑党そのものであった。

一九四一年二月八日に日本軍がタイに侵攻すると、政府の大弾圧で三十九年以来壊滅的打撃を蒙っていた僑党は、この機会をとらえて、タイ人の愛国意識に訴えてタイ人の中にも党勢を拡大しようと試みた。僑党は四二年二月一日にはタイ共産党(Phak Communist Thai、なお一九五二年の第二回党大会で、タイ国共産党 Phak Communist haeng Prathet Thaiと改名された。ただし本章ではタイ共産党という表記で統一する)として再建された。僑党指導者は、タイ生まれの二三世の華人青年党員たちに、タイ共産党の幹部の地位を与えた。これら青年党員は僑党幹部が養成した弟子たちであり、中国語のほかにタイ語も理解できるので、対タイ人工作要員としても有用であった。タイ人動員を狙ったタイ共産党は、戦中においては、期待されたほどにはタイ人社会に浸透することはできなかった。その理由はタイ人の抗日運動は、タイ共産党ではなく、自由タイ運動に結集して行われたからである。

タイ人の中にタイ共産党が急速な拡大を見せたのは、戦後の一九四六年に、三三年に立法された反共法が一時的ながら廃止され、共産党の活動が自由化したのちのことである。この時期にタイ共産党と僑党とは別個の組織に分離された。僑党の方は、一九五三年に解散され、構成員の多くは中国に帰国したので、タイの共産主義運動は、タイ共産党に残った党員によって担われることとなった。戦後のタイ共産党には、プラサート・サップスントン(一九三―一九四年をはじめ知名度のあるタイ知識人が少なからず参加したが、党の中枢部は一九八〇年代半ばの党の消滅に至るまで、戦争中に中心的活動家となった華人党員たちが、一貫して掌握しつづけた。彼ら華人トップ指導者たちは、戦後に入党した華裔ではないタイ知識人の一部とともに、一九五〇年代に北京のマルクスレーニン主義学院で長期の研修を受けた「文献⑩」。華僑の党から発展したタイ共産党は、人的組織的にはもとより、理論的にも、武器・物質面でも中国共産党と密接な関係を有し、その活動は中国共産党、中国政府の方針によって大きく左右された。

タイ共産党の力は、一九六〇―七〇年代には農村にも拡大した。とりわけタイ政府が学生運動や左翼運動を弾圧した七六年一〇月六日事件後は、武力闘争参加者が急増してその力はピークに達した。しかし、一九七八年末のベトナム軍のカンボジア進攻とそれに続く中国軍のベトナム制裁によって、東南アジア大陸部の国際関係は大きく変動した。中国はタイ共産党の対タイ政府闘争を支援することを中止して、タイ政府との関係改善に転じた。また、タイ政府も共産党参加者への恩赦方針を採用した。これらの転換を契機として、タイ共産党は多くの投降者を出し急速に瓦解に向かう。投降した者たちの一部は、共産党の中枢は、重要事項は中国語でコミュニケートする華人によって占められ、中国に従属していると批判した。彼らは、タイ語を中国人訛りで話す、当時のタイ共産党の最有力指導者ウィラット・アンカターウォン(中国名は方流、一九二二年南タイ生、少年期からバンコクで生活、九六年当時中国で重病療養中)をタイ名ではなく、彼が北京のマルクスレーニン主義学院時代に使用した「張遠」という中国名で呼び、タイ共産党の国内的性格を揶揄した。ウィラットは青年時代の戦中から僑党幹部と重要党務を共にした人物で、戦中以来タイ共産党を牛耳ってきた華人系幹部の代表格であった。

従来タイ共産党の歴史は、厚いベールに覆われていた。タイ共産党の公式の党史は存在せず、同党の指導者が筆名を用いて、一個人の資格で党内用に書いた、文庫本サイズで一五二頁の、具体的な人名には言及しない簡略な党史「文献⑪」が知られているだけである。この党史はウィラット作といわれる「文献⑫」。

一九七〇年代の学生運動はタイ共産党の強い影響下にあった「文献⑬」ので、学生運動の経験を有するタイ人研究者は、タイ共産党の歴史に強い関心を示した。その結果いくつかの英文博士論文が書かれている。しかし、これらの博士論文では、タイにおける僑党の歴史を記録した多数の中国語文献「文献⑭⑮⑯」は、全く参照されていない。実は、これらの僑党文献でも、僑党メンバーとして革命後の中国に帰国した者については詳述されているのに比して、戦後

僑党が分離した際、タイ共産党に残った人物については、中国名もしくは変名で時に登場する程度にすぎない。二〇〇一年半ばになって、戦中以来タイ共産党の主要党員として労働運動を指導し、政治局員もつとめたダムリ・ルアンスタム(中国名は呉維美、一九二三年バンコク生)の手になる記録が出版された(文献⑤)。同書は、国際情勢についての必要なまでに長い解説や上記僑党文献のタイ語訳に、スペースの過半を費やしているが、戦中のタイ共産党の具体的な活動を初めて明らかにした貴重な記録も含まれている。反共法が廃止されたので、今後タイ共産党側からの記録がさらに出版されることが期待される。

本章では、筆者自身が実施したタイ共産党の元幹部四名へのインタビュのほかに、僑党文献、刊行されたダムリの記録などを主要な資料として、何人かの主要党員の具体的経歴を明らかにし、これらを通して、タイ政府の弾圧で壊滅に近い打撃を受けたシャム共産党組織が、四二年にタイ共産党として再建される過程、そのための新しい華人青年党員の養成、太平洋戦争期のタイ共産党の組織と活動を明らかにすることを試みる。

一 華僑の共産党(僑党)の活動

タイにおける共産主義の組織的運動の存在を示す最も初期の事例としては、一九二四年一月三〇日にバンコクの中国国民党暹羅総支部から左派が分離し、第二支部を結成した(文献⑥)という事実を挙げることができる。タイで華僑の共産党(僑党)に参加し、のちに中国に帰国して物故した者の活動歴を、人物ごとに記録した『泰国帰僑英雄録』の第三巻までは、僑党の創立年を一九二六年と記していたが(文献⑦第一巻四二頁)、第四巻になってはじめて、僑党の活動が一九二三年に遡ること、その最初の支部の責任者は陳灼之であったという新事実を記載した。その記述

によれば、一九〇一年に海南島に生まれた陳灼之は師範学校卒業後、一九一七年に来タイし叔父の製材所の職員として働いた。彼はタイやマラヤで活動していた徐天炳の紹介で入党し、一九二三年に最初の支部を五名で結成して、支部書記に就任した。二四年に支部が「特支」(特別支部のことと思われる)に変わったのちも書記の任にあり、二八年に結成された暹羅反帝大同盟の責任者にも就任した。特支を基に、二九年に「泰国特委」(南洋共産党暹羅特別委員会のことと思われる)が成立した際にも、最初の七カ月間のみ特委書記の任にあった。彼は三一―三二年には、南タイのストラナーで活動したが、三二年末に官憲に追われて帰国した(文献⑧第四巻一〇〇―一〇二頁)。

このように華僑の共産党運動は一九二三年には成立していたが、共産主義運動が活発化したのは、二七年四月に蔣介石が反共クーデターを起こし、共産主義者を弾圧したため、中国から多数の共産主義者が避難来タイしてからのことである(文献⑨)。タイの共産主義運動は、二九年までには、中国共産党下の南洋共産党暹羅特別委員会が指導するところとなった。三〇年には、コミンテルン東方局は、在タイ華僑の組織と東北タイのベトナム人の共産主義者グループとの合流を勧告し、同年九月に華僑とベトナム人からなるシャム共産党中央委員会が成立した。当時の党員は二二〇名であり、タイ人は一人もいなかった(文献⑩)。

シャム共産党は、三〇年代前半には、華僑・華人の多いバンコクを含む中部タイと、ベトナム人の多い東北タイとを中心に、王族、人民党支配の打倒、シャム・ソビエト政権の樹立を呼びかけるピラをタイ人に向けても配布するなどして、活発な宣伝活動を行った。しかし、三六年に至ると政府の逮捕弾圧により活動は下火となった。ベトナム系党員の活動は、この時にほぼ消滅した。三七年に日中戦争が始まると、中国系社会の抗日熱は高揚した。華僑党員は闘争目標をタイ政権打倒から抗日に転換し、暹羅華僑各界抗日救国連合会(抗連)を組織し、運動を再度活発化させた。しかし三八年一月には抗連幹部は一斉逮捕された(文献⑪)。

共産主義運動の高まりに対して、タイ政府は一九二七年九月五日に、刑法一〇四条改正法、および私立学校法改正法(政治経済の主義を教えることを禁じた)を施行し、共産主義活動の取り締りを本格化した。刑法一〇四条は、非合法な方法による政治経済体制の変更、国王・政府への憎悪、または階級間憎悪を宣伝した者、もしくはそのような意図を有する団体の構成員に対して、一〇年以下の懲役および五〇〇〇バーツ以下の罰金を課した。特に暴力による政府転覆や政治経済体制変更の計画をもっていた場合は、死刑か終身刑という重罰を定めた(文献⑤)。さらに、三三年四月二日には最初の反共法も施行した。これらの法規により共産党の活動に対し、厳しい取り締りが実施された。

一九三〇年代前半のシャム共産党の活動を、タイ共産党の内部資料である党史は、次のように記している。すなわち、シャム共産党は、帝国主義打倒、封建主義打倒、シャム労働政権の樹立を革命目標として掲げた。当時の党員の大部分は中国人とベトナム人であった。彼らは労働者、学生、青年をある程度組織した。労働者を指導して生活上のために闘争を行い、メーデーやロシア革命記念日にはピラを配布したり、高所に赤旗を掲げたりした。運動は反動政府のたび重なる弾圧を受け、三六年までにはベトナム人とその子孫である党員の大部分は逮捕されるか、国外追放に処せられた。三七年には中国で抗日戦争が勃発した。タイの中国入党員および中国系の党員は中国入社会の中で活動し、中国人民の抗日戦争を支援した。タイの支配階級はこれに大弾圧を加えたので、投獄されたり国外追放になった同志は数多い(文献④四一―四四頁)。

さらに、日中戦争期にタイ政府の共産党弾圧によって党組織が蒙った打撃の様子を、同党史は、次のように記している。すなわち、「一九三九年に至ると、党指導部が弱体化し、既存組織も分裂して統一性を欠く状態になった。そこで指導部は香港に常駐していたコミンテルン代表に助言を求めた。一九四〇年にコミンテルン代表は、組織に統一性を与え、タイの共産党を新たに組織できるようにするために、特別委員会を設立することを提言してきた。特別

委員会が一定程度活動すると、組織の団結は進行した。とりわけ都市の労働者、学生、小資本家階級の中に、新しい力を育てた。日本軍がタイに侵攻する少し前になると、組織の中はタイ人の同志と中国人の同志のみだけとなり、ベトナム人の同志はすでに祖国解放の任務に転じていた(文献④四四―四五頁)。党史は上記引用部分に至って初めてタイ人の党員に言及している。これは従来中国系社会に限られていた共産党の活動がタイ人社会にも広がりはじめたことを強調するためであろうが、党史がタイ人として扱ったタイ籍華人以外にタイ入党員が存在したのかどうか判る資料は存在しない。

上記引用に見るように、一九三九年に壊滅的な状態となったシャム共産党(僑党)は、一九四〇年にコミンテルンの助言を得て、再建が開始された。この時コミンテルンから派遣されてきたのが、李啓新(一九一〇年海南島生)である。彼はマラヤ共産党書記であった三四年六月に、イギリス当局に逮捕され四年間の入獄後、三八年に中国に送還された人物である(文献⑤一七〇頁)。彼は、それ以前からタイで活動していた僑党指導者丘及(一九一〇―一八四年、後述)、李華(一九二一―一八八年、潮州生、中国で共青团活動後三二年米タイし中華学校教師)らとともに、特別委員会を組織したと思われる。特別委員会の活動によって新しい力が育った、という上記党史の記述からは、党勢が増大したように読めるが、当時は、旧組織の再建は困難であり、年少の華人労働者、生徒を革命家として新たに養成することに着手したばかりというのが実態であったと思われる。このように推測できる根拠は、同党史が続いて「一九四一年末に日本がタイ国を占領したが、従来の大衆組織の大部分はすでに機能が麻痺して活動できなかつたので、新たな組織を作る必要があった。そこでまず、武力抗日を目的に抗日義勇隊の組織に着手した。しかし当時の党の力量は極めて弱小であった(文献④四五一―四六頁)と記していることである。同じく、僑党史編纂の中心人物であった謝光も日本軍がタイを占領した頃の僑党の状態について、「中国抗戦初期に設立した泰園華僑の各種抗日団体は、すべて公然たる活動を

停止していた。少数の先進的な群衆は抗日を求めていたが、連絡が付かないので、凝集力に乏しかった。すでに意見の対立から不統一に陥っていた僑党組織は、情勢の急変にいつそう分裂を深めた。日本軍侵攻の五日後に、党の指導部は泰国抗日義勇隊の設立を提議したが、抗日積極分子が極めて少数加わっただけで、武装闘争を展開することは困難であった〔文献④三三九—三四〇頁〕と同様の内容を記述している。この記述にも見るように、日中戦争初期における僑党の中心的大衆組織、抗連はすでに四一年七月に解散していた〔文献⑤三四三頁〕。

二 新しい力の参加

上述の党史では、僑党は戦争直前に都市の労働者、学生、小資本家の中に新しい力を育てたことを記している。ここにいう新たに養成された世代が、党史の著者ウィラット（方流）などのタイ籍華人世代であり、彼らがタイ共産党指導部を八〇年代の崩壊まで、四〇年間にわたり掌握しつづけた。本節では、この世代に属する労働指導者で元タイ共産党政治局員であったダムリ・ルアンスタム（呂維美）氏、および七〇年代のタイ共産党のトップ理論家であり、中央委員であったチャオ・ポンピチット（劉源弘）氏への筆者インタビュの成果を主要な資料として、彼らの出身、経歴、僑党に参加した経緯、あるいは参加した当時の僑党の組織や活動などについてできるだけ具体的に見てみたい。

ダムリは一九二三年にバンコクで生まれた。彼の祖父が潮州からタイに来たので、ダムリは三世に当たる。祖父にはタイ人妻と潮州に住む中国人妻とがあり、ダムリの父を生んだのはタイ人妻の方である。ダムリの父には、三人の兄と一人の姉があった。ダムリの父はタイの徴兵を避けるために、青年期に潮州に送られ、そこで中国人女性と結婚した。父親はこの女性とバンコクに帰り、五男一女をもうけた。ダムリはその次男で弟三人、妹一人がいる。ダムリ

はバンコクで、三年間の初等教育を一〇歳で終えた。彼は中等学校に進学して、さらに大学に進むことを考えていた。しかし小学校を終えたころ、父がすぐ年上の兄の保証人をしていたために破産し、家庭が貧困になった。進学を諦めたダムリは若い女性教師が開いていた私塾に通い中国語を学んだ。この女性教師は進歩派でダムリに崇実学校に学ぶように勧めた〔文献⑥〕。

崇実とは僑党の指導的地位にある共産党幹部たちが教師をつとめた中華学校であった〔文献⑦三七—三二八頁〕。ダムリは三十七年、ちょうど日中戦争が始まった年に、一四歳で崇実に入學した。入學した当初は、教師の汚い格好に失望した。タイの学校では教師はネクタイをして整然とした格好で教えていたのとは大違いであった。崇実の教師は月五バーツという安い月給で働き、貧乏な学生からは月謝を徴収しなかった。崇実では毎朝体操があった。毎月曜日には情勢報告という授業があった。このような政治教育はタイの学校にはなかった。ダムリは崇実がタイ政府から廃校処分を受けるまでの一年余、一六歳まで在學した。同校に学びながら、弟妹たちの学費を稼いで母を助けるために、伯母（父の姉）の嫁ぎ先が経営する質屋で働いた。ダムリは学校のある日は、放課後一五時ごろから二一時過ぎまで質屋で働いてのちに帰宅した。学校が休みの時は、一日中質屋で働いた。伯母の質屋には、使用人を人間扱いせず暴力を振るう上海の学校を出た従兄がいた。従兄とは言え、姓も違うので親しくはなかった。ダムリを含め従業員に暴力を振るう従兄を身近に目にして、それを崇実の作文で「人が人を食う社会」という題で書いた。教師は作文を褒めて、「このような社会は変えねばならない」と書き込みをして返却した。そのころ、ダムリは、乞食の子や売春婦など貧困や社会悪をテーマとしたナイイ・シンラビー（パソコン・ブーラナパソコン）夫妻などの小説を好んで読んだ。小説に描かれていることと自分の境遇は似ていた。崇実では、タイ語力は十分だからタイ語の授業に出る必要はない、図書室で中国語の本を読むようにと指導された。図書室で、社会主義國の話を書いた中国語の本を読み、貧困な者でも高い

教育を受けることができる社会主義に共感を覚えた「文献⑩」。

ダムリは、タイ仏印紛争が生じた一九四〇年末頃、伯母の質屋での従兄の傲慢な態度に我慢できず、また質屋の仕事は休日がなく、毎日朝早くから夜遅くまで働き通しなので勉強する時間もないことにも不満で、質屋を辞めて石鹸工場の労働者に転職した。この時は、八時間の仕事、八時間の休息、八時間の学習を心がけた。英語を学ぶために夜間学校にも通った。英語を学んだ理由は、検定試験で中学八年卒の資格を得て、タマサート大学に入学したかったためである。彼はこのときマッチ工場の労働者や徒弟奉公中の労働者（これは後出のチャオを指すと思われる）と交際して、日曜日に政治や国際情勢についての学習会を開いたり、労働者のために中国語をローマ字で学ぶ会を組織したりした「文献⑪一三七頁」。ダムリの回想では、彼が共産党の考えに近づいたのは、この頃である。彼はビブーンの失地回復に批判的で、家族と意見がちがったことを記憶している「文献⑫」。ところが、工場に出て二カ月すると、母親と兄が、弟妹の教育費を捻出するため、再び伯母のところに戻って働くように求めた。傲慢な従兄は中国に行き、アメリカから帰った別の従兄（後にタイタヌ銀行マネージャー）が香港の銀行やインドシナ銀行と協力して送金・郵便の新しいビジネスを始めるので、ダムリに帳簿を担当させたいというのである。やむを得ずダムリは石鹸工場を辞め、従兄のビジネスで働くことにした。そこで四三年一月に党の指示で労働者工作に工場に潜入するまで働くことになった。そのため英語を勉強してタマサート大学に入学するという計画は断たれてしまった。しかし、その代わりに、四一年六月にブノンペンからバンコクでの活動に戻った僑党の指導者、丘及からエスペラント語と政治経済学とを学ぶことができた「文献⑬⑭」。

ダムリが僑党組織に加わる契機となったのは、学習会に丘及を指導者として招いたことであろう。ダムリは、三九一年に崇実を出た後も、抗日の意識が強く、進歩派の本屋に出入りしていたが、そこでできた人脈を通じて、丘及を紹介されたのである。その後、丘及は、ダムリの母と潮州で同郷であることが判り、一層親密になった「文献⑮」。

丘及は一九一〇年にタイで生まれた客家の四世であるが、四歳の時に中国に送られた。中国の美術専門学校を卒業後そのまま中国で教師をしながら、中国共産党員として活動した。タイに戻ったのは、国民党政府に逮捕されたのち、釈放された三六年のことである。東北タイのコーンケンで中華学校の教師となり、日中戦争が始まると東北タイにおいて抗日運動を指導した。その後バンコクに中華中学の教師として転勤し、抗連の本部で指導に当たった。三九年九月に香港の八路軍駐港弁事処の廖承志のもとに連絡に行き、その後ラオスで活動していたが、同年末に仏印当局に逮捕された「文献⑯一二二頁」。釈放後ブノンペンで活動し、バンコクに戻ったのは四一年八月になってからであった。バンコクで彼は、中国共産党旅暹羅工作委員会常務委員（中共旅暹工委常委）として宣伝部の責任者であった「文献⑰四三五一四三六頁」。丘及はタイ生まれながら、中国育ちで、タイ語は片言程度にしか話せなかった。彼の任務は、タイ政府の弾圧で大打撃を受けた僑党の再建であったと考えられる。ダムリら青年華人男女にエスペラントやマルクス主義を教えたのも、党再建活動の一環としてであろう。

丘及を迎えての学習会にダムリとともに参加したのは、五名の青年華人男女であった。ダムリのほかには、ダムリの学生時からの親友で裕福な家庭の生まれであるが戦中にダムリとともに工場に労働者工作のため潜入したウット・ウドムプラサート、後述するチャオ・ボンピット（劉源泓）、戦中に女性労働指導者となったマンヤート（梁曼茵）、タイで抗日、革命運動の後、左翼中華学校の同級生である夫とともに革命後の中国に帰ったチャウイー（李琦）である「文献⑱⑲」。ダムリは、世界の人々がエスペラントという共通の言葉で話し合うことができれば、互いに理解しあうことができ、戦争もなくなると考えていた。丘及はエスペラント語や共産主義の理論の外にも、書画に優れるとともに、人に感銘を与える名文家でもあった、また、その人柄は周恩来に近いものがあつた。ダムリもチャオも今日に

至るまで丘及を深く尊敬している「文献⑩」。

チャオ・ボンピット(劉源泓または劉泓)はチャーン・グラサナイブラの筆名で知られ、党の中央委員であるとともに、一九七〇年代の党において中心的理論家であった「文献⑪一七三、二二四頁」。タイ共産党の最有力者であった二歳年長のウィラット(方流)とは、最初から活動を共にした盟友である。チャオは一九二三年南タイのラノン生まれで、広東移民の第三世代である。幼少時に両親を失いバンコクの親類のもとに預けられた。彼はバンコクで小学四年を卒業した。この学校では、教師の指導の下に、中国の洪水に救援物資などを集める活動をした。当時は幼少で愛国を意識していたわけではないが、小学校時代から無意識のうちに中国に対する愛国運動に参加したことになる。彼の受けた公教育はこれのみで、あとは独学である。中国語も独学によってマスターしたもので、彼の共産主義に関する理論、知識はすべて中国語文献を通じて得たものである。彼の中国語の實力は、その自宅が中国語図書で溢れていること、また、タイ総理府が中国語歴史文献中のタイ関連部分を翻訳するために設立した歴史研究プロジェクトの委員に、一九九一年に一三年ぶりに中国から帰国した後に任じられていることから知られることができる。タイ語については、戦中に中学六年レベルのタイ語検定試験に合格している「文献⑫」。

チャオは一五歳の時、生活のために工場に見習徒弟として入った。年少の未熟労働者を、食事宿泊場所は雇い主持ちで、三年間徒弟として低賃金で使うのは当時の一般的労働慣行であった。ダムリらの労働運動は、後にこの慣行を廃止に追い込んだ。チャオは一年目は月二バーツ、二年目は月二・五バーツ、三年目は月三バーツの手当を給されただけで過ぎない。三年間の見習い期間が終わると、一人前の師傅(Chief)待遇となり、チャオの工場では、五つボタンの服を着ることができた。しかし、チャオは三年間の見習期間が終わり、師傅になると間もなく共産党の活動の必要上退職することになった。それは戦争の始まる少し前で、一九四一年のことである「文献⑬」。

四一年一月八日に日本軍がタイに侵攻するや、二月二三日に僑党指導部は、戦機が熟した時に、武力闘争に立ち上がる準備として抗日義勇隊を組織することを決定した。ダムリやチャオらの学習会は抗日義勇隊の基礎の一つとなった「文献⑭八八、九六、一五三頁」。一九四〇年から海南人(中国籍およびタイ籍)の鉄工労働者が結成していた曼谷鉄業工人互助社が、まず四一年一月半ばには抗日義勇隊の小隊の組織化に成功し、その隊員数は一年後には三〇人余に達した。一九二六年生まれの若年ながら、謝光はこの隊の党側指導員であった「文献⑮二九頁、⑯一九三頁」。次いで、チャオが中心となって組織化に着手し、四二年に成立した広東人の機械工(同じく中国籍、タイ籍が混在)の機器工人互助社が、一〇名で抗日義勇隊を立ち上げた「文献⑰第一卷一八〇頁、⑱二六五―二六六頁、⑲一九三頁」。

抗日を大義名分として、主として華僑華人労働者を僑党指導下の抗日義勇隊に組織する活動が開始された。しかし労働者組織を欠いた状態で、抗日義勇隊を組織化することは困難であった。そのため、まず職場ごとに労働者を互助社へ組織化する必要が認識され、労働者工作に力が注がれた。抗日義勇隊が軍事訓練に着手できる実力に達したのは、後述するように創立から三年以上を経た、戦争末期の四五年になってからのことである。

当時の僑党は機関誌も発行できない状態であったが、日本軍の侵攻後、タイ語および中国語の機関誌の発刊準備を開始した。四二年三月一日にはタイ語地下機関誌マハーチョン発刊の会議が開かれ、同年五月のメーデーの日に第一号が発刊された。マハーチョンは日本帝国主義追放、ピブーン独裁政権打倒、人民民主主義推進、タイ中国関係改善を趣旨として、丘及が論説を中国語で書き、ダムリがタイ語に翻訳して出版した。当時のマハーチョンには編集長はおらず、出版チームがあるのみであった。当初の発行部数は一〇〇部程度であった。丘及・魏特夫妻は国際放送を聴取して中国語で国際情勢についての原稿も作成したが、これもダムリがタイ語に訳した。国内のニュースと分析を担当したのは、一九二〇年頃タイ中北部のピット県に生まれたベトナム系の青年、トン・チェムシーである。ト

ンはダムリの親友ウットと二人で印刷も担当した。出版費用の一部は金持ちのウットが提供した〔文献⑤⑥⑦⑧〕。マハーチョンは四四年二月二十六日号が、第三号であるから、月刊誌以上の間隔で出版されたことになる。中国語の地下機関誌である真話報は、四二年七月二十五日に発刊されたが、同誌は社説を僑党トップの李啓新が書き、中国の抗戦ニュースは丘及夫妻が担当し、英米の反ファシスト闘争の情報は、ウィラット(方流)が担当した。ウィラットの情報源は秘密裏に聴取したデリー放送やBBC放送であった。丘及はタイの国内ニュースも担当した〔文献④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺〕。真話報は一九四四年九月五日号が第四四号であるから、マハーチョンの倍程度の頻度で出版されたようである〔文献⑳〕。

三 タイ共産党の成立

タイ共産党は一九四二年二月一日に成立した。タイ共産党の立ち上げは、一九四〇年に始まった党の再建作業の帰結であり、一九三〇年からシャム共産党と称していた僑党が、一九三九年にタイ政府の弾圧で壊滅状態になったあと、四二年末に至ってタイ共産党という名で再建されたものと見ることが出来る。一九六〇―七〇年代のタイ国共産党は、自らの結党の日として、四二年二月一日を重視したが、成立したタイ共産党は、旧来の僑党と連続しており、その組織、指導体制、あるいは路線に実質的な変化は生じなかった。

組織的には、新しい党が作られたというよりも、既存の僑党組織にタイ共産党という公称を与えたというのが実態であった。抗日義勇隊のメンバー構成やマハーチョンや真話報の出版陣の構成について前に見たように、中国籍華僑党員とタイ生まれの華人党員とが、同一組織に同一資格で所属していたが、この状態はタイ共産党成立後も何ら変わ

らなかった。党史も、「戦後、中国人同志はタイの党 Phak Thai から別れ、中国人を指導して祖国の革命を支援するために別個の組織をもった。この組織は新中国が建設されて程なく解散された〔文献①五七頁〕と述べ、中国籍の華僑党員とタイ生まれの党員とが別個の組織となるのは、戦後であることを明言している。しかも、戦後においても、どの程度別組織になったのかについては疑問が残る。プラサート・サップスントンは、自らが入党した一九四六年末の党組織について、「また中国の党 Phak Chin とタイの党 Phak Thai は一つであった。また中国の党であった。戦後には、タイ側と中国側との二つに分けてはいたが、同一の党であった。タイ側 Fai Thai とは中国人の子のことであり、中国側 Fai Chin とは中国から来た中国人のことである〔文献①〕と述べている。

また、タイ共産党の実質的指導権も従来通り、李啓新、丘及、李華らの掌中にある〔文献②第一卷四二―四三頁〕。李啓新と李華も丘及と同じように中共旅暹工委に属していたと考えられる。タイ共産党の書記長には、東北タイのスリン県で一九一〇年頃に生まれた華人のソン・ノックパン(中国名は余松、別名乃穆、バイラット・ノックパン、プラソン・ウォンウィットなど)が就任した〔文献③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺〕。ソンはバンコクの新民学校で初等および中等教育を受けた人物である。タイ共産党のトップであるはずの書記長ソンと僑党幹部との関係は、ダムリの次のような記録から窺うことができる。

一九四四年九月初めに、内務大臣スッパチャラーサイ(自由タイ派)がマハーチョン誌幹部に会いたがっているという情報が、同大臣の運転手を通じて、タイ側労働指導組織にもたらされた際、ダムリは後述するバンコクトンブリ地区タイ側特務指導センター総責任者であるソンに報告した。ソンとダムリは、これは極秘事項なので同大臣と会見する代表者は自分たちでは決めず、上部に決定してもらうことにした〔文献②二四三―二四四頁〕。さらに、ダムリが著作中で引用している、ウィロート・アムバイの手記によれば、四四年一〇月一五日に、ウィロートがマハーチョン

誌の仕事をしている時、ソンから李華が今すぐに会いたいと言っていると告げられた。ウィロートが用件を問うても、ソンは用件が何かを知らず、ただ指定された場所を知っているだけであった。ウィロートが指定場所に着くと、李華が蟻美厚とともに待っていた。蟻美厚の案内で、李華は真話報の代表、ウィロートはマハーチョン誌の代表としてスッパチャラーサイ内務相と会見した〔文献⑨九七、二四二頁〕。

以上の記録から、公式上は共産党トップであるはずのソンには決定権はなく、彼自身も自らの上部であると考えていた僑党指導者に実権があったこと、僑党指導者の一人である李華にとっては、ソンは伝令程度の存在に過ぎなかったことが判る。また、マハーチョンの代表であるウィロートは、会見について何ら事前に知らされることなく、もちろん決定に何ら与ることもなく、ただ李華の指示に従って会見に同行したことも判明する。

一九四三年二月一〇日に共産党は、抗日義勇隊の指導的メンバーを工場に潜入させ、労働者工作を実施すること、まず労働者を政治色のない互助社に組織して経済闘争から始めること、⁽¹⁾を決めた。党の指示でダムリとウットはマハーチョン出版の任を離れ、工場に潜入して労働者工作を担当することとなった。ダムリらは試行錯誤ののち、四三年半ばに民間造船所に労働者として潜入した。その造船所の労働者の大部分は中国人(華僑・華人)で、彼らにはすでに共産党の組織があったが、タイ人労働者は中国人労働者とは言葉が通じず、組織もなかった。ダムリは孤立していたタイ人労働者たちに接近して、互助社を設立させ、その長におさまった〔文献⑩一三一、一五〇—一六一頁〕。

中国系労働者に比し、組織化が遅れているタイ人労働者の組織化のため、四四年初めに党は、タイ人労働者の多い二つの国営タバコ工場での工作に乗り出すことを決めた。弟のウットに影響されて、遅れて党活動に参加するようになった兄のシー・アノータイ⁽³⁾(一九二二年バンコク生はトンとともに、タバコ工場に潜入した。ダムリとウットも一年二ヵ月働いた造船所を辞め、同年五月に別のタバコ工場に潜入した〔文献⑩二二三、二三一—二三三頁〕。四四年七月に

は、ソン・ノックパンを総責任者とし、その下に、それぞれ異なる担当地区を代表するトンとダムリを配したバンコクトンブリー地区タイ側特務指導センターが設立された〔文献⑩二三九頁〕。

ダムリやトンが四三年二月にマハーチョン出版の任務を離れたのち、同誌の出版は、ソンやウィロート・アムパイ(一九一八年バンコク生が担当することになった〔文献⑩一三三頁〕。ウィロートはダムリより五歳年長だが、党活動を開始した時期では同期生である。ウィロートは、母親がタイ人であるだけではなく、タイ軍に徴兵され下士官で退役した経験も有しており、タイ人社会との関わりが深かった〔文献⑩⑩〕。ウィロートは中国語もよくし、一九六五年頃中国から帰って離党したのは、ブッタタートの著作を漢訳して出版している。

ウィロートは四三年三月にマハーチョン担当になる前には、チュラーロンコン大学の新聞学夜間コースで学んでおり、同学仲間(官吏が多い)とサハバンという団体を作り、家を借りて会合をしていた〔文献⑩二四四—二四六頁〕。ウィロートが学んだ、新聞学夜間コースは、文学部が一九四〇年から開講したもので、開講初年度だけでも受講者は二〇〇人に上った。戦中の同大学では、多くの学部が夜間コースを開いており、夜間学生総数は三〇〇〇人に達した。⁽⁴⁾戦後後半期には、新聞学夜間コースには、ソンの次にタイ共産党書記長に就任したチャロン・ワンガム(ウボン出身でスワンクラブ校を卒業したラーオ系タイ人)や戦後のマハーチョン編集長であるサック・スパーカーセム(アユタヤ生まれの華人、一九九五年頃死)も学んでいた〔文献⑩⑩、⑩三三—二四頁〕。チャロンもサックも、ウィロートが社長をつとめたマハーチョンで戦後働いていることから、ウィロート人脈だと考えられる。

戦時におけるタイ共産党のインテリ学生グループとしては、ウィロートのチュラーロンコン大グループのほかに、アサンプシオンなど有名中等学校の学生グループが存在した。後者のメンバーの一人は、サナン・ウォーラブルック(林沙南、一九二六—一九九九年)である。彼はバンコクで福建系の豊かな家庭に生まれ、初等教育を新民学校で、中

等教育を名門私立のアサンプシオン校で受けたのち、太平洋戦争期間を通じてアサンプシオン商業学校に在籍した。彼は、中、タイ、英語をよくした「文献⑩」。サナンは戦後マルクス主義文献のタイ語訳や論文執筆をしながら、共産党の『マイトリ・サーン』誌などの編集長もつとめたが、一九五三年に北京に渡り、國務院の通訳などに従事した。晩年はタイに戻った「文献⑫」。

バンコクトンブリー地区タイ側特務指導センターは、新たに組織したタイ人労働者グループとインテリ学生グループとの結合を計画し、一九四四年一〇月末にアサンプシオン校の宿舎に両者代表を集めて会議を開き、泰独立団(カナ・タイ・エーカーラト)を結成した。アサンプシオン商業学校在学中のサナンは、泰独立団の宣伝担当委員に選出された。同団結成後は、ダムリはタイ人労働者に対しては泰独立団の名で勧誘した「文献⑬三三九頁、⑭」。

中国系労働者の組織化はタイ人労働者に比してはるかに進んでいた。四四年一月一七日に、業種ごとに組織された中国系労働者の一六の抗日秘密労組は、曼谷市各業工人連合会(曼連、サハバーン・カマコン・ナコンクルンタープ)を組織した「文献⑮二五三頁、⑯一九八―一九九頁」。その主席には、三六年に海南島からタイに出稼ぎに来て、皮革労働者をしてながら四一年頃に僑党に加わった何題楷(一九一六―一九一一年が就任した「文献⑰第三卷四〇五―四〇八頁」。

一九四四年一月末に曼連、泰独立団、真話報、マハーチョン誌など共産党系の七団体が集まって、反日大同盟(サハサマコム・トーターン・ジープン)の結成準備を開始した。一月後の二月三日には、全国から四〇名の代表がトンブリーのサトウキビ畑に集まり、丘及を議長として反日大同盟第一回代表者大会を開催した。大会は逮捕を避けるため、極秘の場所で開催され、短時間のうちに終了した「文献⑱⑩」。反日大同盟は、「全人民を結集して戦い日本帝国主義をタイ国から追い出すこと、中国やその他の諸国を支援して日本ファシズムを撲滅すること」を主目的としたもので、大会にはベトミン代表もオブザーバーとして参加した。大会は一名の執行委員を選出した。執行委員

の会議は、執行部の責任者として真話報代表楊世瑞(林秀)を華文秘書長に、マハーチョン代表のウィロート・アムバをタイ文秘書長に選出した「文献⑲二二、五〇頁、⑳」。

前述した共産党とスツパチャラーサイ内相と第一回の会見ののち、四四年一月一九日頃に第二回目の会見が行われた。第二回目は丘及とウィロートが訪問した。一回目は挨拶程度であったが、二回目は同内相に、共産党は二つの地下機関誌の出版のほかにも、抗日義勇隊を組織していることを明らかにして、抗日義勇隊の活動への便宜供与と武器援助を求めた。内相は前者へは協力を約束したが、後者については自由タイの長であるフリーデーと相談しなければならぬと答えた。そこで、丘及とウィロートはフリーデーとの会見を希望した。四五年一月半ばに実現したフリーデーとの会見で、共産党側は反日大同盟の結成を明らかにした。フリーデーは、何かあれば内相と連絡をと

るようにと答えた。しかしこの会見以降終戦まで、連絡がとられることはなかった「文献㉑二四四―二四八頁」。

共産党は、一九四四年末に、情勢の急速な変化により、武力闘争の機が熟したと判断した。四五年二―三月には、武器購入のための募金や武器の募集を本格化した。同時に抗日義勇隊員の再登録を行い、志願者に武器訓練を開始した。バンコクと南タイには、抗日義勇隊の総司令部を設置した。バンコクの総司令部の総責任者



図1 反日大同盟の成立を伝えるタイ共産党地下機関誌「マハーチョン」第23号、1944年12月26日号。

にはウィラットが任じられた。ウィラットは丘及の監督の下に活動した。南タイの総司令部(泰南義隊総部)については、ソン・ノックン書記長が総責任者となり、チャオは政治主任に就任した。終戦時武装し戦闘態勢にある抗日義勇隊員は、全国で計六五〇人に上った。南タイの義勇隊はマラヤ人民抗日軍第八独立隊から訓練、武器の援助を受けた。ただし、全国を通じて抗日義勇隊の、日本軍に対する組織的攻撃は一回のみで、それは終戦後の八月十九日に実施された、ソンクラー県テーバー部の日本軍小部隊への夜襲であった〔文献⑤二二二—二二八、二七六頁、⑥六、二二七、二二三頁、⑥六九頁、⑨⑩〕

おわりに

本章では、弾圧と内部分裂によって力を失ったシャム共産党をタイ共産党として再建する際に、僑党幹部によって新たにリクルートされた華人青年党員に焦点を当てて、従来不明な点が多かった、タイ共産党成立前後の共産主義運動をできるだけ説明しようと試みた。これらの華人青年たちは、中国語とタイ語双方を理解できたので、中国系社会とタイ人社会の架け橋になることができる人材であった。彼らの参加によって、共産主義運動は、とりわけ戦後には、華僑・華人社会を越えて、タイ人社会に拡大した。しかし、八〇年代におけるタイ共産党の解体に至るまで、共産党の中枢部は創業者である彼らが掌握し続けた。彼らにとって師であり兄である僑党幹部の属する中国共産党の動きに、タイ共産党は終始左右され続けた。

本章では、太平洋戦争期においては、党の主要構成要素であった華僑党員の組織と活動、および戦後におけるプラサート・サップスントンなど著名タイ人知識人の入党、活動については、紙幅を割くことができなかった。これらについても、すでに相当の資料調査を終えているので、別の機会を待ちたい。

(1) 僑党の歴史を記録に留めることに尽力した謝光(一九二六—一九九九年)が、チュラーロンコーン大学アジア研究所中国研究センターの依頼にて、タイにおける共産主義運動史を作成中であったが、彼の死亡によって中断した。すでに作成されていた、一九〇六年から一九九年までの部分は、同研究センターでタイ語訳を終了しており近刊予定である。村嶋のタイ華僑の共産主義運動の研究〔文献⑥〕にはない新事実が明らかになるものと期待される。なお、謝光は海南島出身で四歳で来タイし、新民学校を卒業したのち、労働者として働きながら共産主義運動に参加し、本章に記すように年少ながら活躍した。戦後は僑党の指導者の一人として活動し僑党の解散により一九五三年に帰国した。帰国後中国共産党の機関に勤務し、八五年に退職した〔文献②③④〕。その後、中国とタイの間を往復しながら文献②③④の編集に尽力した。

(2) 戦中の在タイ日本軍は、共産主義運動についても相当の情報を把握していたと推測されるが、ほとんど残存していない。数少ない残存資料、「泰國華僑の現状及び動向」(大東亜省「情報」第二十七号、昭和一九年七月一日、八六頁)は、「共産党華僑分子」から成る党を「泰國共産党」と表現した上で、泰共はバンコクに本部をもち、真話報および大衆報(マハーチョンの漢訳名)という秘密宣伝機関誌を発行していること、泰國抗日義勇隊などの団体を有することを記している。さらにこの報告では一九四三年九月に憲兵隊が泰共党員三四名を逮捕したため、バンコク本部は一時窒息したと記しているが、チャオによれば戦争中に幹部レベルの党員が逮捕されたことは全くなく、バンコク本部の活動も何ら影響を受けなかったという〔文献⑥〕。

(3) カシアンは著書〔文献⑦〕の四六頁で、バンコクの有名中等学校で共産主義の思想に接したルークチーン(同書二二五頁のカシアンの定義では、自らをタイ人であると感じているタイ生まれの中国系の人々)が、卒業後工場に労働者工作のために労働者として潜入し組織的共産主義活動を行ったことを戦前の事例として提示し、この事例をもって、戦前にすでにルークチーンは共産主義運動が存在していたという彼の主張の主要な根拠としている。しかしこれは全くの事実誤認である。このように誤りは、彼が自ら調査をすることなく、サンシットの著作の誤った記述〔文献⑧二五一—二五三頁〕を無批判に採用したうえ

に、根拠のない推測を加えたために生じたものである。彼が挙げた例が生じたのは、本章で述べているように、戦前ではなく、太平洋戦争中のことである。工場潜入について見れば、カシアンが戦前に労働者として工場に潜入したと誤解した、良家出身のルークチーン、シー・アノータイが、国営タバコ工場に労働者として潜入したのは四四年初になってからである。また、本章でサナンを例にして述べているようにアサンブションなどの有名中等学校生が共産党の影響下に組織を作ったのも戦中のことである。カシアンは架空のことを事実として記しているだけではない。彼はその架空事を主要な根拠として、同書二二五頁の半分以上を費やして、戦前のタイ華僑の政治活動をテーマとした村嶋のタイ語著作「文献⑥」は、ルークチーンというカテゴリーを設けていないので概念化を完全に誤っていると、見当違いな論難を加えている。本章で詳述しているように、戦争直前において僑党の指導下に、タイ生まれでタイ国籍を有する華人の青年男女が僑党の共産主義運動に組み込まれているが、戦前期の彼らは、カシアンの言うようなタイ人としての意識を有していたであろうか。彼らはせいぜい中国、タイ双方への重層的アイデンティティをもっていたに過ぎない。中国かタイかという二分論は妥当しないのである。さらに、戦前期の彼らは僑党指導者のもとで養成中の段階にあり、ルークチーン独自の組織的活動は、カシアンの如く架空のことを事実と誤解した場合を除けば実例に乏しい。それ故、戦前においては、タイ生まれの華人華裔の共産主義運動を、独立したカテゴリーとして取り上げる意味は乏しいのである。加えて、そもそも拙著「文献⑥」はサブタイトルにも「一九二四―四一年における在タイ国華僑の政治運動」と明記しているように、戦前期の在タイ華僑の政治活動を国民党、共産党に分けて研究したものであり、カシアンのいう意味でのルークチーン政治活動は研究課題外である。カシアンは村嶋の先行研究が最初から対象とはしていないことを持ち出して、それが欠けていると批判を行ったうえ、その批判の根拠としては、その時期には存在もしていなかった架空の事例に拠るといふ二重の誤りを重ねている。詳述は避けるが、カシアンは戦中のタイ共産党の組織、指導についても誤解している。戦後の部分については価値ある内容を有するカシアンの著作が、学術書としての質的要件を充たす前に、出版されたことは惜しまれる。

(4) *Wichakan Nangsuphin Chulalongkorn Mahawithayalai*, 23 Oct., 1961, p. 32.

(5) 暹連は一九四六年一月一六日の第二回代表大会で、曼谷職工連合総会(サマーコム・サハーチワ・カマコン・クルンテ

ープ)と改名した。主席は何題掲のままであったが、この時にはタイ人の労働者組織も加わり、ダムリが副主席に就任した(「文献③」三五頁)。

(6) *Mahaachon*, No. 23, 26 Dec., 1944, p. 4.

参考・参照文献

- ① Tho. Phianwithaya, *Prawai lae boirian bangprakan khong phatrao*, 1978. (我が党の歴史とくつかの教訓) タイ国共産党の秘密党内文書)。
- ② 泰國帰僑聯誼会(英魂録)編委会編『泰國帰僑英魂録一―四卷』中国華僑出版社、北京、一九八九―九七年。
- ③ 泰國帰僑聯誼会(湄江風雲)編委会編『湄江風雲——泰國華僑抗日愛國活動回憶録』中国華僑出版社、北京、一九九三年。
- ④ 李啓新『湄江留聲』北京、一九九〇年。
- ⑤ Damri Ruangsutham, *Khabunkan raengganhai nai kantolan kongthapjipun nai songkhranlok khwangthisong*, Sukhap-hapchai, Bangkok, 2001. (第二次大戦期の日本軍への抵抗におけるタイ労働運動)。
- ⑥ Murashima, Eiji, *Kanmuang Chin-Sayam: kanhlanwai thangkannuang khong chaochiphonthale nai prathethai*, *hko. so. 1924-1941*, Institute of Asian Studies, Chulalongkorn University, Bangkok, 1996.
- ⑦ Prasert Sapsunthon 氏との筆者インタビュー(一九八一年六月一六日、八三年四月二二日、バンコクにて)。
- ⑧ Udon Sisuan 氏との筆者インタビュー(一九九二年二月二五日、バンコクにて)。
- ⑨ Chao Phongphichit 氏(勳源弘)との筆者インタビュー(一九九六年一〇月一七日、二〇〇〇年二月一七日、二〇〇一年二月二八日、バンコクにて)。
- ⑩ Damri Ruangsutham (暹羅美氏)との筆者インタビュー(一九九九年二月二九日、二〇〇〇年一月二六日、バンコクにて)。
- ⑪ 村嶋英治「タイ華僑の政治活動——五・三〇運動から日中戦争まで」原不二夫編『東南アジア華僑と中国』アジア経済研究所研究双書四三六号、一九九三年。

- ① 栗原浩英「ロッキンキルンと「東南マシマ」」(東京外国語大学AAA研「東南マシマと1920世紀とは何か」プロジェクト一九九八年七月三日報告レシヨム)。
- ② 村嶋英治「一九七〇年代のタイ国における学生運動と共産主義」『マシマ研究』第三巻一二号、一九八二年。
- ③ Wichak Nanthayut, *Semhang chiwit lae lokathat thangkammuang Phin Bua-on ru Annal Yulhawitwat*, Bangkok, 2001.
- ④ Luang Athakowitwathi, *Khun banyai ruang kanpalhbat lam phrachabanyat pongkan kantrathamphit thi pen communist*, Bangkok, 1953.
- ⑤ Sungsidh Piriyarangsarn, *Prawai kanlosu khong kamakonhai*, Bangkok, 1986.
- ⑥ Rudi Rerngchai, *Yohung nai krassae than*, Bangkok, 1996.
- ⑦ Pho. Muang Chomphu (Udom Sisuan), *Su samoraphum phuphan, pai muanghang*, Bangkok, 1987.
- ⑧ 『本報暹(Sanan Woraphruk)』 Bangkok, 2000.
- ⑨ 本報東京「ロッキンキルンと共産主義」『マシマ研究』(法政大学マシマ大学共産主義センター)第三三号、一九九六年。
- ⑩ Murashima, Eiji, "Samphanthamit thai-jipun kap chaochin nai prathethai samai songkhramlak khrangthisong", Charnvit Kasetsiri, Hayao Fukui eds, *Jipun-Thai-Utsakhane*, The Foundation for the promotion of social sciences and humanities textbooks project, Bangkok, 1998.
- ⑪ 芥末『泰華文化人物辞典』泰中華会、シンゴク、二〇〇〇年。
- ⑫ <暹羅十上代>編纂会編『暹羅十上代』中国中興書局出版社、北京、一九九三年。
- ⑬ 『暹羅文化研究』シンゴク、一九九六年。
- ⑭ C. F. Yong, *The Origins of Malayan Communism*, South Seas Society, Singapore, 1997.
- ⑮ Kasian Tejalpra, *Commodifying Marxism: The Formation of Modern Thai Radical Culture, 1927-1958*, Kyoto Area Studies on Asia Vol. 3, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2001.